

ブルガリア黒海海岸での皆既日食

報告：小池 由紀子、角本 繁 (1999. 10. 31記)

1. 日食の状況

観測場所は、予測の中心線に近い、地図からは北緯43度31分50秒、東経28度36分20秒と読めるNOS SHABLAの灯台の南で、黒海の海岸段丘の上であった。この前日の下見で決定した観測場所は、小型の石油採掘ポンプが遺品として残る地元のヨットクラブの敷地で、数棟のバンガローとレストランがあった。当日は、ロシア、スウェーデンからの観測者に地元ブルガリアのアマチュア天文グループの人たちが集まっていたが、欧州に滞在中の一旅行者に会うだけで他に日本のグループはいなかった。情報誌に気象条件が良いと書かれており、日本から相当数のグループが観測に出かけたにもかかわらず、ブルガリア滞在中は、不思議なことに1グループにも出会わなかった。

完全な形の証拠は一部消えてしまったが、ビデオ画像とタイマーなどからの総合判断では、第2接触：14時11分17秒(現地時間)、第3接触：14時13分38秒、継続時間：2分21秒であった。主要な観測機材は、赤道儀(ピクセン)に望遠鏡(高橋：F065, 焦点：500mmをエクステンダーで800mmに延長)、特性のシャドウバンド観測シート、双眼鏡、カメラ、に加えて最も重要な特長的な機材は過去の経験を通して汎用性と柔軟性が保証された22個の眼球であった。観測時の気象条件は雲量0で空気も澄んでいる快晴で、日食雲の影響も無かった。南中を少し過ぎて高度は60度強に輝くコロナは、極大期の特長を呈し、ブルガリアの国花のバラを象徴するような方向性の感じられないものであった。プロミネンスは肉眼でも3つ以上ははっきり確認でき、美しさのアクセントになっていた。予感通りとも言えるが残念ながら、シャドウバンドは前後とも目視確認はできなかった。

2. 観測地の選定

観測の候補地としてブルガリアという場所が話題に出たのは、ベネズエラ日食の前であったと記憶している。しかし、日本から参加したツアーのメンバー10人で、最終的に候補地が決められたのは1ヶ月前で、ホテルなどの予約の最終確認ができたのは出発の2週間前と言う状況であった。ブルガリアを候補地にしたきっかけは、各人それぞれになんとなく感じた親しみであった。観測グループを作りツアーを企画する上で、コソボ内乱やトルコのテロなどの影響も気になり、ぎりぎりまで最終決定を延ばしたが、最終結果としてブルガリアの黒海沿岸に決めた。

気象条件としては、トルコ、イランと同程度にブルガリアの黒海沿岸は期待できた。ブルガリアの内陸からハンガリー、ドイツと内陸を西側に進むに従って、天気の安定性は低下するよう思われた。継続時間や太陽高度の条件からは、トルコよりも西のブルガリアからハンガリーまでが良いと判断できた。日本の大学に來ている留学生との出会いなどもあって、黒海沿岸についての情報の収集ができ、素晴らしいリゾート地があることも分かり最終結論に達した。

8月の黒海沿岸は連日快晴という一般論には疑心暗鬼で、ソフィアからバルナに向かう1時間足らずの飛行機からは、航路上の雲の変化を観察した。途中の陸上では、高層雲の散在した場所

から、積乱雲が発達し天気の不安定の地域があったが、黒海沿岸に着く前で雲のある地域を抜け出した。日食前日の朝には、海岸線に沿って内陸側に帯状の雲が出ていたが、観測地を探しに北上するに従って雲は完全に消えていた。天気の周期性をレストランで取ってあった新聞で確認させてもらったが、8月は晴れるのに調べる必要は無いのではと怪訝な顔をされる状況であった。当日は、幸い朝から夜まで雲のかけらも見ることがなかった。

海岸の天気が悪く、逆に内陸の天気が良い場合の西方への移動、南北の移動を考えながら下見を終えた。前夜は、木星、土星が黒海の上に輝いていた。海岸の崖の上に建つ快適なリゾートホテルは、皆既帯を僅かに南に外れたバルナ市の近くのセント・コンスタンチンという場所にあり、夕方の美しい海岸では海水浴が楽しめ、水平線から昇る太陽は朝から一日の快晴を約束するかの輝きを帯びていた。

3. 旅行記

行き先とルートの決定などに手間取ったため、事前の打ち合わせ会でツアー同行メンバーが顔を合わせでも、お互いの観測内容を把握する余裕がないままの出発になった。しかも、欧州で開かれた会議に出席の2人は途中のウィーンで合流という状況であった。

ソフィアの空港から同行した美人ガイド愛称ガブチャンは日本に1年間留学していたソフィア大学の学生であった。日本文化にも明るく博学で、流暢な日本語を話す彼女は、最初の出会いからグループに溶け込みメンバーは11人になった。何人かは日食が見えなくてもこのグループにいるだけで満足と思ったほど、明るい見通しを感じさせた出会いであった。

ブルガリアでは、マケドニアとスラブの文化が融合しており、特にビザンチン帝国として9世紀から11世紀にわたって栄えたが、オスマントルコの侵略に対して、キリスト教をよりどころに国の思想と文化を守ったと見ることができる。永い歴史の中で周辺の国に対して脅威であり、現在の国境とドナウ川の間のも最も肥沃な穀倉地帯も分割されルーマニアに併合されたこと、第2次大戦での爆撃の話などを聞き、陸続きの国々の厳しい歴史を感じた。現在の経済的水準は高くないが、つましい生活の中で分化水準の高さを感じられた。ロシア文字と認識していたキリル文字などもブルガリアを発祥としている。所得も低い物が安いで、食費や物価は日本と比べて1/10位に感じられた。4日間の昼食と豪華な夕食、みやげ物を加えても両替した15000円はあまってしまった。

通貨のデノミで0のやたらに多い紙幣と新紙幣の使い方に慣れた頃、バラの国を後にし、香水と楽しかった思い出になってしまった。その後、今回撮影した写真をプリントしたブルガリア製のTシャツと一緒に、現地の新聞に取り上げられた記事が送られてきた。見出しは、「日本人は2000年にこの世が終わりになるとは信じていない」というものであった。ブルガリアの多くの人々はハルマゲドンなどを本当に信じ、世の終焉を心配しているのだろうか？ガブチャン、新聞記者さんなどを通じた今後の交流と、次回の日食に国際グループの結成を期待するメンバーが少なからずできたことは、ツアーの成果であったと考えている。